# 池に投げた小石

（幼児の色盲と交通標識について）

大熊米子

たいへん風変りな表題を掲げたもの……と我ながら感心している。しかし、私の気持としては、この拙い一文が、静かな池に投げられた石のような役割を持ってくれて、次から次へと次第に大きな美しい波紋をよんでくれたら、本当に嬉しいと思っている。なぜと言って、その石は余りに小さく、その池は余りに大きいから……。

……

幼稚園の前の交番に、毎日、昨日の交通事故の件数や、死傷者の数を掲示する立札がある。「あんなものを毎朝必ず見るなんて悪趣味ですよ、第一、朝の気分がこわされるでしょう」と言う人もある。「それノイローゼじゃありません？」と真顔で心配してくれる人もいる。それでも私はやっぱり毎日死傷者の数をあらためて見ないではいられない。朝登園するこどもが、皆来尽してしまってからと、さよならをしたこども達が、家にすっかり帰りついた頃、私はやっとほっとする。いや、幼稚園ばかりではない、家に在っても、大学生になった頑丈な娘や、背丈など私より遙かに高く逞しくなった中学生の息子達にでさえも、登校の為に家を出て一時間位は、よそから電話がかかって来る度にはっとしている。若しや！　と思うからだ。心配症と言って笑ってばかりもいられない。そんな交通事情に、都会の私達は晒されているからだ。

「だから、交通道徳をよく守って、信号を正しく見て歩きさえすれば……」と常識家は言う。確に、私達正常の眼の働きを持っている者は、それで或る程度安全に通行が出来るであろう。しかし、その唯一の頼りとする信号を、正しく守ろうとしても、その安全性に頼り切れない人々がいる事を、私達は忘れてはならないと思う。たとえ数は少なくとも、少ないからと言って知らぬ顔をしていてもよいという事は決してない。

たいへん持ってまわった表現をしたが、その人達こそ、色盲、色弱という名で呼ばれる人達なのである。種類や、程度に差こそあれ、その人達は現在の医学では如何と

も為し難く、一生涯正しく物の色を認識出来ないという宿命を負うて行かねばならないのだ。正常の人と同じ色に見えないとは言っても、情緒的な生活においては、その人達にはその人達としての美の世界は勿論あるに違いない。原色の赤や緑が見分けられないでも、或いはもっとデリケートな美しい色の世界を持っているかもしれない。流行のパステルカラーなどの美しさは、むしろ色盲の人達の方が先に味っていたのだろうから、必ずしも色盲が不幸であるとばかりは言い切れない。幼稚園で、たまたま色盲色弱の子どもがあった時、私達はその母親にこう言って力付ける。「どの色が本当の色かという事は、私達にだって言えないのかもしれませんよ、お母さまと私とだって、若しかしたら違う色に見えているのかもしれないでしょう？　だから、お互に持っている色の世界が違うのだと思えばいいでしょう……お母さまがお子さんの為に、それをたいへん不幸な事だと思う余り、悲観した様子を見せたり、言っても致し方のない事をお子さんに向って嘆いたりしてはだめですよ。大きくなってから、一生の方針を決めるような時には、多少は初めから除外して考えなければならない幾つかの職種があるでしょうけれど、今では、その程度によって、ずい分考慮もされますし、いくらでも進む道はありますもの、その時には、お子さん自身で力強く御自分の道をお選びになりますよ、唯ね、お母さまと私達が、今気をつけなければいけない事は、ゴーストップの信号ですね」私は殊更にさらりとこの最後のことばを言うのだが、それは、自分の愛児が色盲だという事で、唯さえ慄えている若い母親の心を、重なる心配で押しつぶしてしまわない為である。だが本当は、この時私の心の中では、交通標識の赤ランプが激しく明滅しているのだ。正しい交通道徳を養う事によって、現在の夥しい交通事故から、こどもを守ろうとする私達のせい一杯の努力にかかわらず、交通標識の色が正しく識別出来ないこどもには、それを、どう教えたらよいというのだろう。どうして、大切な人命を司る標識を、判別出来ない人もあるという事が判っていながら放置しておくのだろう。判別出来ない人は少数だから……と言うのだろうか、少数なら放っておいてもよいというのだろうか、色盲の人達の為には何ら策を施さないでおいて、しかもその人達には運転関係の仕事に就く権利だけを封じているではないか。何という冷たい施策であろう。

「色盲者よ、あなた達少数の者は、自分の眼が悪いのだから勝手に怪我をするがよい、しかし健全な他の多数の人達に怪我をさせてはならないから、交通標識の判別出来ない人は運転関係の仕事に就く事は禁ずる」という片手落ちの冷やかさ。色盲という、本人には何の罪もない宿命の為に、公道を安全に歩くという基本的人権をさえ認められない人達！　殊に、すべての事に経験の少ないこれら色盲のこども達は、何を

頼りに歩こうとするのか、いや歩かせようとするのか……

昭和三十四年度の新入学童から、入学時に色盲の検査が行なわれる事が、学校保健法で定められた。それに伴って、色盲の検査表も、就学前後のこどもを対象とした、三角とか四角というような図形、或いは動物などの形で作られた。私の園でも、発育に測定の機会専門家に依頼して、年長組のこどもに対してこの検査を行なってみた。ところがその結果、色弱と判定されたものは五十名程のこどもの中に二名あった。これまでは、色盲というのは、何かたいへん特別な人達の事のように思っていたのに、日頃同じ庭で、同じ部屋で、同じように遊んでいるこども達の中から、二名も該当者がいるという事は、私達にとってたいへんなショックであった。しかしこの事実は、別に特別な事でも何でもなく、平均して男児の場合約二十人に一人が色盲なのだそうである。五%と聞いた時は少ないような気がしていたのに、同じ事を、一級に一人半位の割だと数えて、お蔵に火がついたような驚き方であった。

それでは、このこども達には、あの交通標識がどのように見えているのだろうか？

それが小さい色盲者を抱いた私達の先ず第一の大問題であった。早速専門の色盲研究者に訊ねたり、調べたりしたところでは、たいへん恐ろしい事に、危険の赤と、進行の緑とは、同じような色に見えて、区別をつけ難いという事が判った。同じようにグレーを基調としたような色に見えるらしい。これでは、信号を見るようにと教える事が、どんな危険を招く事になるか、考えても恐ろしい事である。誰か交通を司る人達の中で、それを考えた人がいるのだろうか、若しいるとしたら、なぜ今まで世の中の大問題にならなかったのだろうか？安全教育は何の為に研究されているのだろうか？　私はその事があって以来交番の前の立札を素通り出来なくなったようである。そして、こんな事を素人の頭で考えた。色盲の人でも、常人と同じに見えるのは、物の形である。だから交通標識も色ランプを廃し、例えば三角は注意、丸は進行×は停止というような、簡単な図形にしたらどうだろう。実は、交差点ごとに動物の形の標識をつけて、小鳥は進め、象は止れ、魚は注意というようにしたら、どんなに楽しいだろうと考えたら、「いかにも幼稚園の先生らしい考えですがおかしくて……」とさんざん笑われたので図形にする方法を考えたのである。しかし、思い思いに趣向をこらしたネオン眩ゆい街で、果して唯の丸や三角が誰の目からもはっきり判別出来るかどうか、これまたたいへん疑問である。とにかく、この考えを、どういう方向に大きな声で叫んだら反響があるのか、私は先ず幼稚園の先生方にお願いする。どうか、この忘れられた宿命の子らの為に、もう一度交通標識を見上げて、世の中という池に、次の波紋を呼んで下さる事を！